

平成三年六月三十日 郷土研究資料

第百二回 研究発表表

武蔵七党の一つ

野与党諸氏拠点の考察

騎西編

越谷市郷土研究会

理事 山崎善司

武蔵七党の一つ

野与党諸氏拠点の考察

騎西編

越谷市郷土研究会

理事 山崎善司

野与党諸氏の拠点の考察

野与党

野与党の播擧した地域は、武蔵国騎西郡と云われた、埼玉県東部地域で北は、埼玉郡の内、騎西町より南埼玉郡全域を含む八潮市迄の細長い狭狭な地域である。

武蔵国の東部で、足立郡と葛飾郡とに挟まれた南から北西に細長い地域である。西側の境は、元荒川の上流、騎西町より・菖蒲町下栢間より分岐下流は、綾瀬川を境として東京都迄足立郡に接する。

東側の境は、上流は、騎西町より旧利根川河道（現水田地帯）を岩槻に至り、旧隅田川（現会の川）と元荒川合流点より下流は元荒川を境とし、北葛飾郡と接する。

岩槻市より元荒川を吉川橋に至り、その下流は中川と名前が変り、八潮市潮止橋に至り、中川から分岐して旧中川を葛飾区奥戸に至り、綾瀬川との合流点に至る、以上の川を境として、東側が南・北葛飾郡と接する。

註、1、天慶の乱の後、平良文の子忠頼が武蔵押領使となり、以後代々武蔵国を支配し、その子孫が分派し各地に播擧して、中世武士団を形成して行く。

2、「私市党」は、武蔵七党に数える書もあるが、乱後武蔵に押領使として野与党が進出するに及、北部に後退して、忍・熊谷地域に、其の後裔と云える氏族を見る事が出来、その名を留めて居る。

3、「私市」と名乗る一族は、東京五日市市に、其の末裔を見る事が出来る。

野与党系図には、騎西町の内・道智・道後・多賀谷・多名（種足）・高柳等の地名を苗字に冠した人々の名が出て来る。

これ等の人々の事跡に付いては、吾妻鑑に多くの名前が記され、他地区と比較すると、鎌倉期の在地武士達の活躍と動勢を窺い知る事が出来る事は幸いで有る。

騎西地区の野与党諸氏は、野与六郎胤宗 → 太郎元宗 → 野与六郎基永 → 太郎恒永の系からの分派である。
北埼玉郡南部の内、旧利根川河道以南（現騎西町）地

域に分派し播擧した一族が、初期の野与党である。

「野与恒永」奥州の役（後三年の役）にて戦死、子無き為、千葉宗家より、千葉二代下総権守常長武蔵押領使の子、「十郎行長号龍大夫」が野与の地に着任、大蔵大夫を称し、野与党の束ねと成り、子孫が騎西郡一帯に分派、之等を束ねたのが後期の野与党である。

因に、初期の野与一族の拠点は、野与（現白岡町野牛）・大蔵「野与恒永」の舎弟「二郎恒宗」は大蔵二郎を称す（現葛蒲町三箇大蔵）・道智（現騎西町道地）・多賀谷（現騎西町内多ヶ谷）・多名（現騎西町中種足）・鬼窪（現白岡町篠津）・萱間（現葛蒲町栢間）・高柳（現騎西町上高柳）・笠原（鴻巣市笠原）・道後（拠点不明だが鴻巣市郷地？）等である。

以上が、初期の野与一族の拠点である。

註、葛蒲三箇村大蔵 新編武蔵風土記稿には、「三村合併したにより三箇村と名付く」と有る。

後期の野与党一族の拠点は、

1、大蔵新大夫行長（葛蒲町三箇大蔵）よりの分派、
Ⅱ 洪江（岩槻市洪江町）・利生又高柳（騎西町高柳）・南鬼窪（白岡町興善寺付近）・白岡（白岡町丸城）・黒浜（白岡町黒浜）・江ヶ崎（白岡町江ヶ崎）・佐那賀谷（白岡町実ヶ谷）・西脇（不明）等がある。

註、大蔵新大夫行長号利生大夫（又は龍）初期入居時は、現葛蒲町三箇大蔵（現葛蒲町に大蔵の地名残る）に、後岩槻市箕輪に移り、箕勾氏を称す。

2、箕勾氏よりの分派には、

Ⅱ 大相模（現越谷市相模町）・須久毛（現岩槻市笹久保）・横根（岩槻市横根）・栢崎（岩槻市栢崎）・神倉（現岩槻市加倉）・古志賀谷（現越谷市越ヶ谷）等がある。

3、洪江氏よりの分派には、

Ⅱ 八条洪江（現八潮市八条）・洪江（岩槻市村国）（金重（岩槻市金重）・野崎（越谷市野島））がある。

*、利生又高柳氏は、行長以後の分派である。

Ⅱ 系図上では後期野与党に属すが、詳細は不明。

*、戸崎氏（騎西町史では騎西町戸崎に想定する）野与党系図上には見当たらない。

*、葛浜氏Ⅱ騎西町史では上崎・下崎を含めるが、大河戸氏の分派で、葛浜氏の本貫地は旧利根川の対岸羽生領・賀須市側上下川崎であろうか。

*、道後氏は、道智頼意の三子で、建久元年十一月入洛の行列の後陣隨兵四十四番に道後小次郎の名見えるも、（鴻巣市郷地か？笠原・郷地共に元荒川の東岸で騎西郡）拠点は詳ならず。

騎西町 (きさいまち)

騎西町は、県東部水田地帯の一面に在り、埼玉古墳群の地に近く、早くから開発されていた事が推測される。

中世には武蔵七党の一、「私市党」(キサイ又はシノ)の根拠地となった町であるが、戦乱に因り「野与党」の支配となり、「私市党」は衰えて、忍・熊谷方面にその勢力を留め、騎西町には、「私市城」と書く城名を残す城跡を留めている。

騎西町には、約二百二十基の板碑がある。その内約百基は、鎌倉時代のもので、地域的に密集している。

騎西町内で最古のものは、騎西町内にある善心寺の仁治三年(一一四二)年銘のもので、最大のもは、根古屋金剛院の線刻三尊来迎図板碑で高さ365cm、幅133cm、厚18cmある。

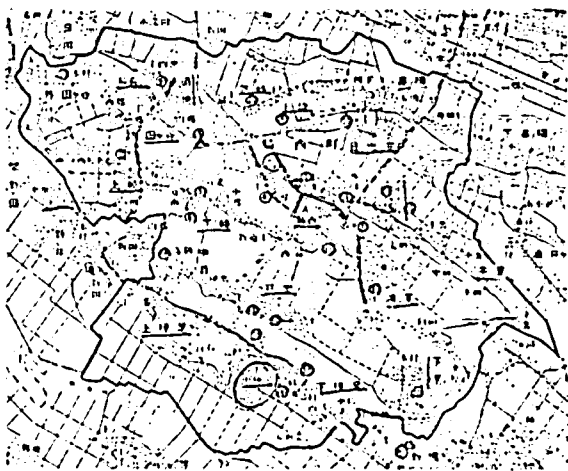
註、1、騎西町史や埼玉の歴史等には、「騎西町は私市党の本拠地であった」、とのみ書かれ、其の後の入部者「野与党」の事が記されて無いが、板碑の年記銘によれば、野与党一族が入部して居た事は明らかであるが、野与党系図には、「騎西」の地名を苗字とした「騎西氏若しくは私市氏」と云う名が見出せない。

2、葛浜氏は、騎西町上・下崎含め想定するが、大河戸氏からの分派で、葛浜は、旧利根川の対岸羽生領が本貫地上・下川崎であろうか。

3、高柳氏は、野与党系図には、野与基永の弟に行忠・高柳とある。

吾妻鑑に、行忠・高柳四郎とある。
吾妻鑑卷四十一、高柳四郎三郎行忠
吾妻鑑卷四十一、時頼放光佛像供養為、建長三年正月廿日、將軍家行列、後陣隨兵中に高柳四郎三郎行忠見ゆ。(初期高柳氏)

又、高柳氏、野与基永→大蔵経長→経遠・泷江の弟に、弘経・利生五郎大夫・又高柳とある
「姓氏家系大辞典」には、桓武平氏野与党、武蔵の豪族にして、七党系図に「野与基永→経長→弘経・利生五郎大夫又高柳」と見える。(後期高柳氏)



騎西町地区域図

大英寺 浄土宗崇龜山松応院 騎西町

大英寺は、加倉村浄国寺の末、当寺は、天正十八年松平周防守根古屋城を賜ひ、居城せし頃、寺領三十石を寄付して建立し、團蓮社満蒼玄道を以て開山とせり。

玄道移転の後、本山第二世無月は兼ねてより、周防守深く帰依し僧なれば、当寺へ請待して二世となり、当寺五十石の内二十石を加増し、後周防守常陸国笠間へ移りし時、其処へも一寺を草創し、彼無月を以て開山と成し、当寺五十石の処二十石を分けて寄付せり。

無月は、寛永三年十月廿九日、示寂せり。

後周防守聞え上げて、同十九年三十石の地を御朱印に願ひ替へしと云ふ。

本尊弥陀は、恵心の作、当寺に小田原北条よりの寄進状と云ものあり、其の状に、

御所陣建立寺家彼敷地之事、

松郷之内、 一町二段、
寺井郷之内、 六段、
合 老町八段、

分銭 二百貫七百文之所
永代令寄付候、

自然河越用所之時、寺家相応之儀可被走廻状、 如件、

弘治二年四月 晦日 明蓮 判 舎

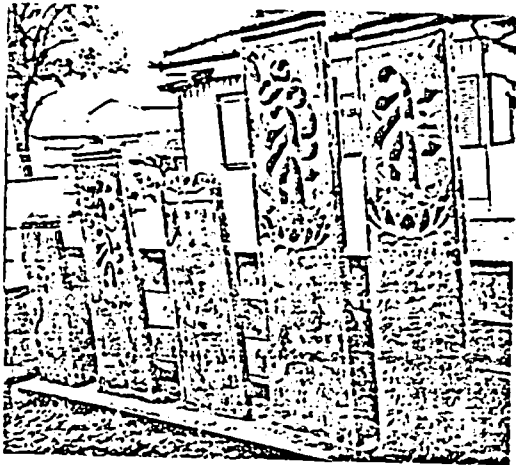
按に、弘治は、当寺未だ聞ざる前の年号にして、明蓮社と云は、当寺之僧なりと云も伝へず、文中松郷寺井郷の名は、入間郡内の地名なれば、恐らく彼寺院の内に伝るものならん、当寺に伝はる所以は詳ならず。

鐘 楼 鐘は、寛延二（一七四九）年の銘有り。

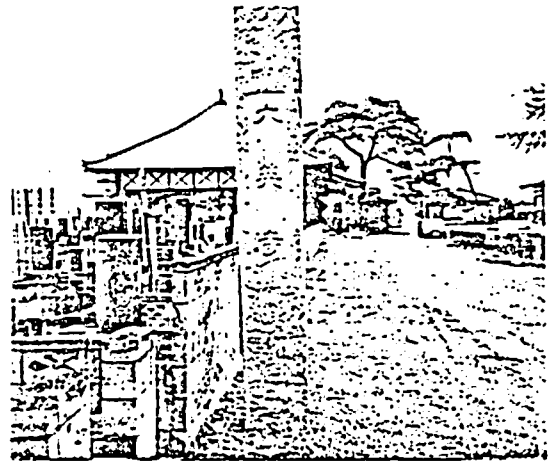
註、大英寺の起立は、前々よりの寺跡に建立されたもので、大英寺の前身の寺は、北条氏からの文書から察するに、川越城攻略の上で重要な寺で在った事が察せられる。

特に私市城の攻防の歴史は、至近に在る此の寺にも、興亡に関する重大な影響が有った事が窺える。

鎌倉期の大英寺の前々身は不明であるが、当大英寺の境内に、多数の鎌倉期よりの板碑を蔵す事は、之等の板碑の年記銘の時代には、この地域の有力支配者の居住地で在った何よりの証であるが、残念乍ら、詳な事は不明である。



大英寺の板碑群

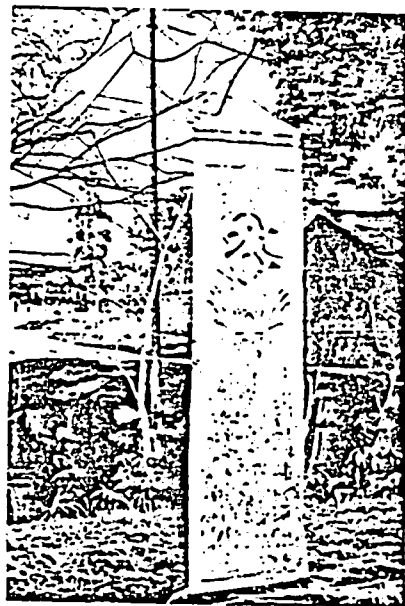


大英寺の全景

善 応 寺 禅宗曹洞派 号愛宕山 騎西

上会下村雲祥寺の末、愛宕山と号す。開山闍室秀大寛
永三年三月廿六日示寂、本尊十一面観音を安す。

仁治三(一二四二)年十二月日 記銘の、245cm
騎西町最古の板碑を蔵す。



善 応 寺 ・ 仁 治 二 年 板 碑

実 乗 院 新義真言宗 号大龍山 騎西

根古屋村金剛院の末、開山弘源、慶長十年七月七日示
寂、本尊十一面観音也。

文保二(一三一九)年二月時正(春彼岸)種子弥陀
欠 年己未 八月彼岸(鎌倉期)の板碑を蔵す。



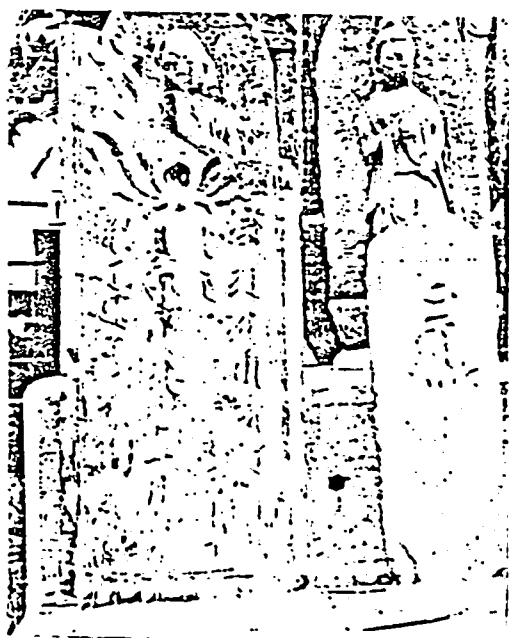
実乗院・文保三年板碑

浄楽寺 一向宗 真宗大谷派 騎西

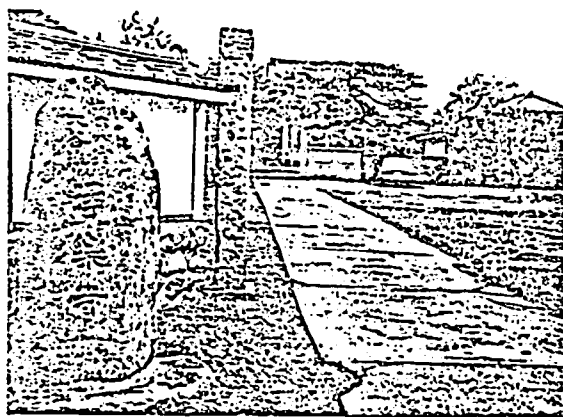
京都東本願寺の末、開山浄楽、元龜三年五月朔日示寂と云ど、之は当寺未だ庵室なりし頃の僧なるべし。後大久保相模守忠騷、資財を供して一寺と成せり、是を当寺の開基とすと云ふ。

鐘楼 鐘は、延宝六年の銘なり。

下欠 主尊莊嚴 開山 ・ 下欠 主尊莊嚴 二世
元亨二(一三三二)年 金剛界大日 ・ 延文二年
(一三五七)十一月 六日 柄 ・ 欠鎖倉期改造
同寺には、以上の板碑を蔵す。



浄楽寺・元亨二年板碑



浄楽寺の全景

騎西地区の板碑

淨樂寺 真言宗大谷派 騎西

大英寺 淨土宗 騎西

正嘉 元年 一二五七 四月十二日 線刻三尊來迎図

文永十二年 一二七五 光明 偈5

弘安 元年 一二七八 十一月 日 三尊 欠

弘安 九年 一二八六 二月 日 釈迦・弥陀 主尊莊嚴

嘉元 元年 一三〇三 十一月廿九日 光明嘉曆二改刻

延曆 二年 一三二七 胎蔵界大日下欠

下欠 名号阿弥陀下欠

善心寺 曹洞宗 騎西

仁治 三年 一二四二 十二月 日 騎西町最古

実乗院 真言宗智山派 騎西

文保 三年 一三一九 二月 時正 光明 春彼岸
己未年 八月彼岸 柄

薬師堂 騎西

下欠・左欠 十 大日
上・下欠 大日・釈迦

元亨二年 一三三二 下欠
延文二年 一三五七 十一月 六日 柄
主尊莊嚴開山
主尊莊嚴二世
金剛界大日
鎌倉期 改造

西円寺 真言宗智山派 下崎

建長 摩滅 一二四九〜五六 四行 摩滅

弘安十一年 一二八八 二月 彼岸第六番造立

延慶 四年 一三一二 二月十六日 主尊莊嚴

応安 五年 一三七二 正十八日 光明主尊釈迦

下欠 弥陀
上欠 鎌倉期?

正福寺 曹洞宗 下崎

文永 八年 一二七一 五月 日 蓮台下部線刻

上下欠 弥陀・釈迦
上下欠 弥陀・釈迦

道智氏

道智氏の拠点は、騎西町大字道智中屋敷・稲荷宮と成就院付近と推測出来る。

道智氏の拠点は、下流の高柳氏の拠点と共に、北東に利根川の旧河道が在り、利根川の自然堤防上に位置し、後背地は耕地や住居に適する地形を備えている。

道智氏の居住した痕跡は、稲荷神社・成就院がある。
 中屋敷・表屋敷・裏屋敷、鍛冶屋敷と称する所あり、成就院には、鎌倉前期の寛元二(一二四四)年二月・鎌倉中期の弘長三(一二六三)年六月日・□安(摩滅)(一二八八?)年期銘の板碑を見る事が出来る。

又、中屋敷の馬橋昌作氏(平成三年八十五才)宅地内に、弘安十八(一二八七)時正、大日・変形五輪塔刻のの板碑・及び嘉暦二(一三二七)年八月廿四日記銘板碑を蔵している。

道智氏の活躍に付いて、吾妻鑑には、

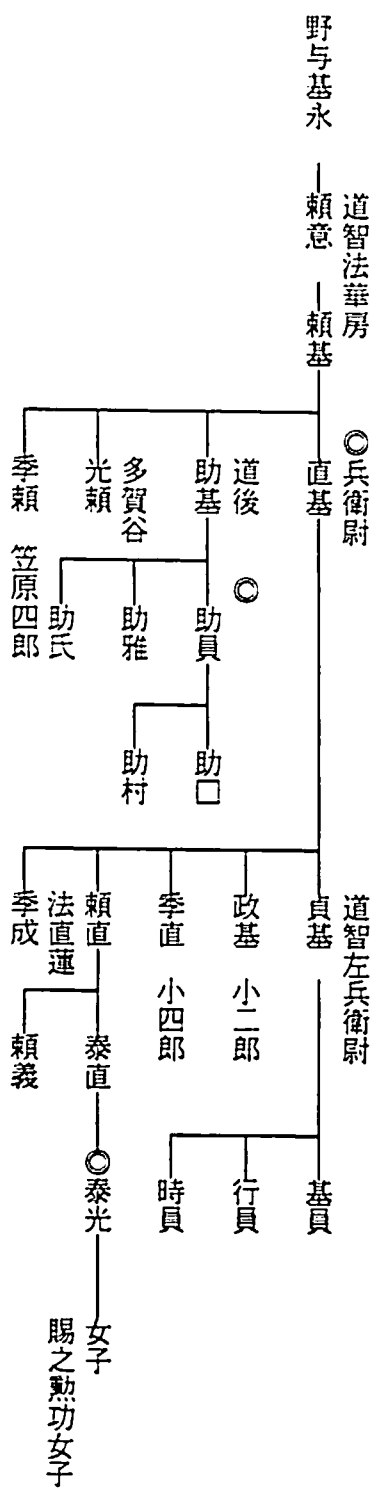
◎ 建久元(一一九〇)年十一月七日、頼朝入洛の随兵の中に、四十四番に道智次郎の名見える。

◎ 道智三郎太郎(助員?) 宇治橋合戦の時、承久三(一二二二)年六月十四日、討死している。

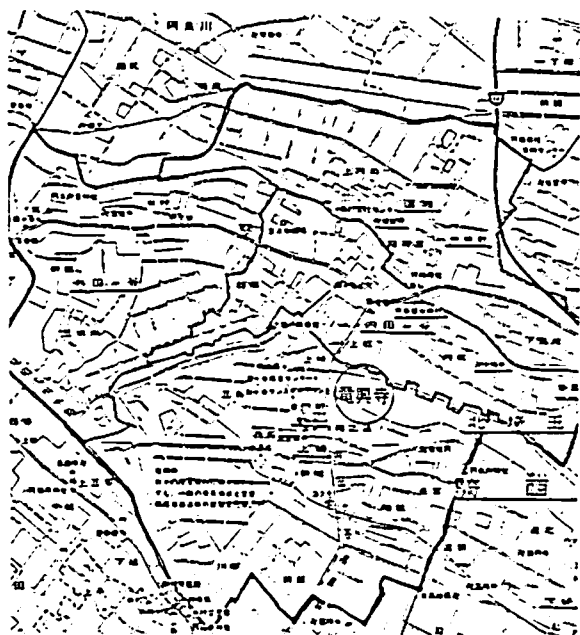
◎ 道智小六郎泰光 正応六(一二九三)年四月廿二日、平左衛門頼綱入道景円が謀反し、其の討手として鎌倉経師谷に於て討死している。

武蔵七党系図には、
 ◎ 道智法華房頼意と其の系の名に、道後(不明)・多賀谷(内多賀谷)・笠原(鴻巣市笠原)・道後氏等の名見える。

註、笠原II和名抄に武蔵国埼玉郷と載す。



道地村 新編武蔵風土記稿



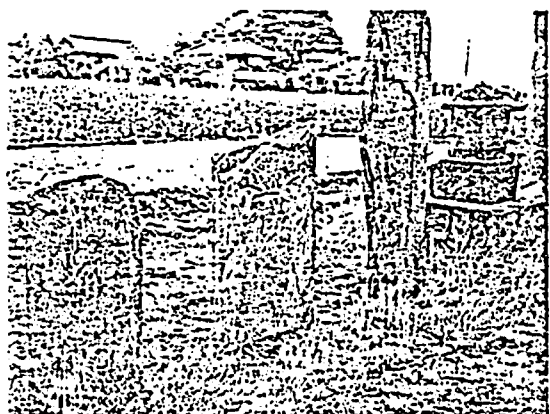
道地・田ヶ谷地区域図

道地村は、太田庄に属す。江戸より行程十五里、東鑑に道智次郎、同三郎太郎承久三(一一二二)年六月十四日宇治川合戦に於て討死と載せたるは、当村に住せし人によ、又遠藤氏の系図にも道智二郎と云う名見ゆ、当国七党系図に道智法花坊とあり、此の法花坊は当所に住せしものなるべし。

小名 中内手・中屋敷・稻荷耕地・下道地・新田

成就院は、新義真言宗智山派、正能村龍花院末寺、稻荷山万福寺と号す。

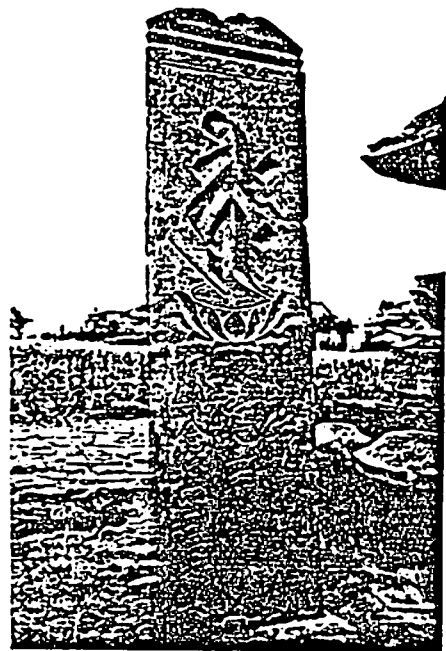
本尊大日を安ず、中興開山は深宵寂年を伝えず。



成就院の板碑群



稻荷山成就院の全景



成就院・寛元二年板碑

成就院

中内手

寛元二	一一四四	年二月	110cm	主尊月輪
弘長三	一二六三	年六月	150cm	光照偏照
□安□□年	弘安十一年?		113cm	

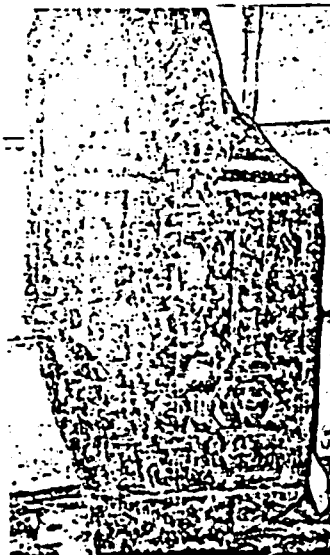
馬橋昌作氏宅

中屋敷

弘安十	一一八七	大日	上・下欠
嘉曆二	一一三七	大日	上・下欠
	八月廿四日		



道地稻荷神社



馬橋昌作氏宅

弘安十八年板碑



馬橋宅板碑

線刻五輪塔

道後氏 (鴻巣市郷地?)

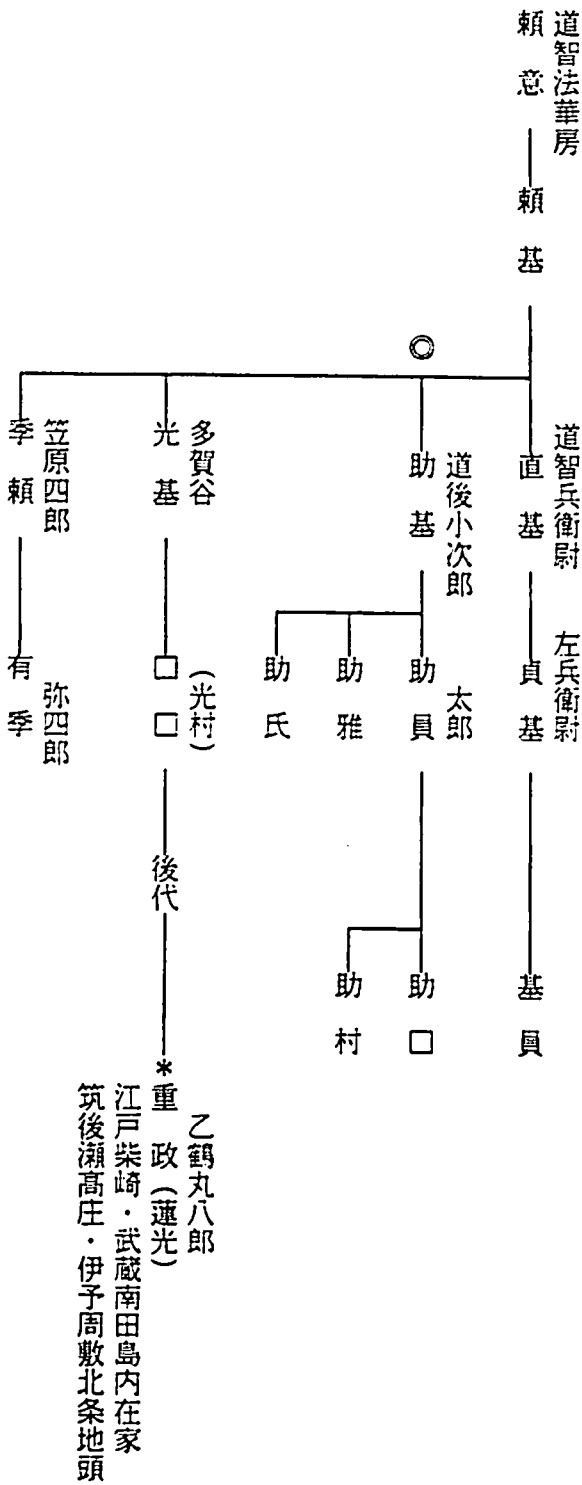
後陣の随兵 四十四番中に、道後小次郎

野与党系図中に、法華房道智頼意・の子頼基・の子に
長子兵衛尉直基(道智)・二子小次郎助基(道後)・三
子二郎光基(多賀谷)・四子四郎季頼(笠原)を載す。

吾妻鑑に、道後氏の名が見えるのは、

◎ 建久元(一一九〇)年十一月七日丁巳、二品の御
入浴、申刻、先陣花洛に入り、六波羅に致らしめ給
ふ。

武蔵七党系図、野与党(抄)



道後氏に付いての記載のものは、以上の如くであるの
で、其の事跡に付いての詳細は不明である。

又、其の拠点に付いても、今の処不明であるが、道智
氏一族の拠点が、多賀谷氏が内多ヶ谷・笠原氏が笠原と
道智氏の拠点と目鼻の地に分派している事から見て、今
の所、特定出来ないが、至近の地点と思われる。(鴻巣
市郷地は、笠原と共に元荒川の東岸、騎西郡である)

乙鶴丸八郎
*重政(蓮光)
江戸柴崎・武蔵南田島内在家
筑後瀬高庄・伊予周敷北条地頭

大福寺は、多賀谷氏館跡也。多賀谷氏は、建久嘉吉(一一九〇〜一四四三)迄の二百五十年間在住し、常陸下妻城に移る。

内田ケ谷郷は、海上郷山根庄に属す。古は西庄田ケ谷村と唱へ、多賀谷氏住せしと云う。

多賀谷氏按ずるに、武蔵国埼玉郡多賀谷郷の住人左衛門尉家政は、金子十郎家忠が二男なり、曆仁元(一二三三)年、頼経の髓兵たり、其の子弥五郎重茂は頼経に仕へ、建長三(一二五一)弓初めを勤め、其の子五郎景茂、宗尊親王に仕へ、康元元(一二五六)年、弓初めに景茂、其の器に撰れ、其の子彦太郎家経、其の子五郎政忠、其の子彦太郎家茂相統す。

其の子弥五郎政朝、下総国結城左衛門尉満広の子源五郎光義を聲となし、家を継がしむ、光義、古郷忘れ難く、結城へ帰りしかば、嫡子彦四郎氏家を始め、家臣随ひ来ると載たれば、この頃迄、当所に住せしなるべし。

大福寺の寺伝に、

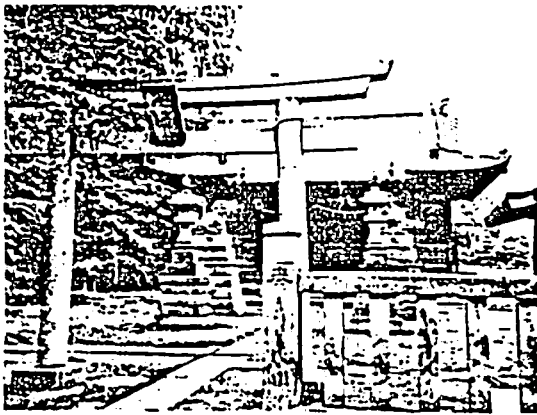
「多賀谷氏下妻へ移し時、館跡へ建立」と云う事見えたと、同記に據れば、「彦四郎氏家一旦常陸へ赴き、後寛正(一四六〇〜六五)年中下妻城取立之に住」とあれば、寺伝に「此処より下妻へ移」と云は誤なり、尚その寺の条下に辯ぜる、家政重茂等が事は東鑑に載せる所も、多賀谷記と符合せり。

又、当国七党系凶野与党に、道智法花坊、多賀谷二郎光基、多賀谷弥三郎某、多賀谷三郎重基、多賀谷四郎久基等云う人見ゆ。

道地村と云は、隣村なれば、是等の人々も当地に住せし事知るべし。

又、外田ケ谷村名主太四郎の先祖は、多賀谷氏に仕えし者也、其の家伝に多賀谷氏の先は、頼朝に仕えて、安芸国 藻刈城を賜り、遥の後宮内小輔武重が時、毛利氏に仕ふと云のみにて其の詳なる事を知らず。

当村、元は内外の分ち無かりしが、騎西領本田の堤を築し時、堤の内を内田ケ谷と云う、堤の外を牛之助新田と云しが、後は外田ケ谷と唱へ二村に分てりとぞ。



多賀谷氏の拠点多賀谷神社

此所は正保の頃は、松平伊豆守が領分にて、元禄九年正木甚五兵衛・会田小左衛門に給はり、残れる地は、御料なりしが、後小笠原五左衛門・久世忠左衛門に給りて、今は正木左近・会田伊右衛門と久世小笠原等知行せり。

大福寺 新義真言宗 熊野山弥陀院

正能村龍花院末、当寺は、多賀谷某下総国下妻へ移りし時、居住の跡へ建立する所也、と云ど、村名の条にも弁ぜし如くなれば、多賀谷光義当所を去つて結城へ赴き、其の館跡へ当寺を建立せる成り。本尊 弥陀を安す。



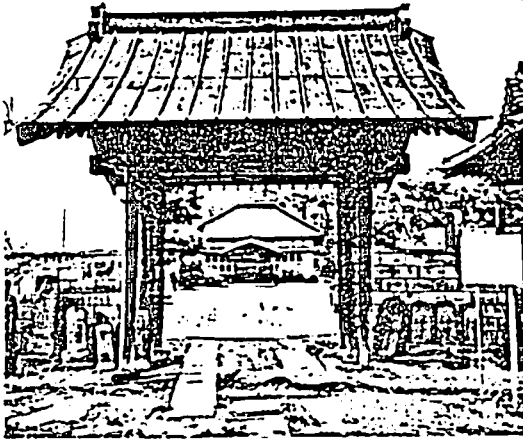
多賀谷氏館跡大福寺全景

多賀谷氏の活躍 吾妻鑑

- 建久元年(一一九〇)十一月七日、頼朝入洛の刻 隨兵の中に、先陣 九番 多賀谷小三郎
- 嘉禎四年(一一三八)二月、藤原頼經入洛の刻 隨兵の中に、廿一番 多賀谷太郎兵衛尉
- 嘉禎四年(一一三八)六月廿日、關東御教書 寄合、多賀江兵衛尉隨分限毎年可致沙汰也、云々、 だがへの二郎入道殿、(多賀谷)
- 仁治二年(一二四二)十二月、武蔵野開墾奉行に 多摩川を掘通し、水田を開く奉行 多賀谷兵衛尉
- 建長三年(一一五一)正月、弓始の射手に撰れ 三番 多賀谷弥五郎重茂
- 建長四年(一一五二)正月、弓始の射手の撰を止 められる。依不有可然射手 多賀谷五郎景茂
- 建長五年(一一五三)正月、弓始の射手に撰ばる 將軍簾中御覽 五番 多賀谷弥五郎(重茂)
- 同、九日、前浜にて御的の射手に 十人の中に 多賀谷弥五郎(重茂)
- 建長六年(一一五四)正月、弓始の射手に 五番 多賀谷弥五郎重茂
- 建長八年(一一五六)正月、弓始の射手に 五番 多賀谷弥五郎重茂
- 正嘉二年(一一五八)正月、弓始の射手に撰ばる 十五日、射手十人の中 五番 多賀谷弥五郎重茂
- 嘉曆三年(一一三八)五月、的始の射手を務める 九日、三番 多賀谷弥平治光忠(景茂の孫?)
- 康永元年(一一四二)十二月、足利尊氏、天竜寺 参詣供奉人に、多賀谷平二光忠見える。

文永 四年 一三六七 五月 日 上下欠入道交名
 文永 七年 一三七〇 三月 日 阿閃
 弘口 十一年 一三八八 十一月廿日 上下欠主尊特殊
 延慶 四年 一三三一 二月十一日 上欠
 延文 二年 一三五七 十二月 〇 上欠光明妙安禪尼
 摩滅略完

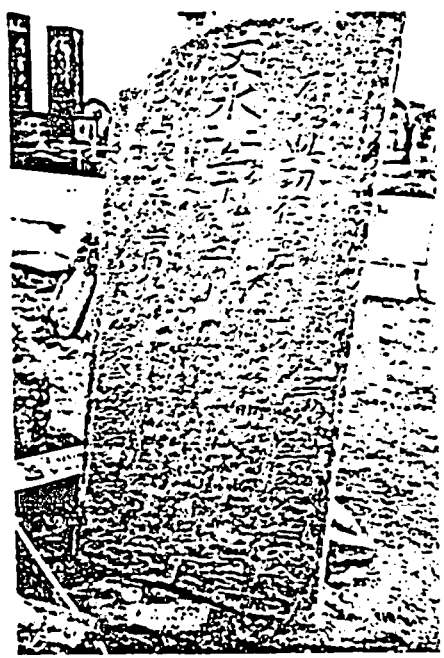
下欠 丸に大日
 下欠 釈迦
 下欠 金剛大日
 下欠 阿弥陀
 破片 丸に阿弥陀
 破片 阿弥陀
 破片 阿弥陀
 上欠 光明真禪尼為逆修
 上欠 光明
 十二日 八日



大福寺門前の板碑



大福寺・延文二年妙安禪尼



大福寺・文永四年

宝性寺 真言宗智山派 外田ヶ谷
 摩滅上欠 阿弥陀偈二三行書

笠原氏

笠原氏の拠点は、鴻巣市笠原である。

今は、取残された地ではあるが、安閑記に「笠原直使主、同族小杆と国造の地位を相争う」記述が見え、又、埼玉古墳群の地に近くで、古より開けた事が知れる。

「姓氏家系大辞典」カサハラノ項に、和名抄に、武威国埼玉郡笠原郷、加佐波良と註す。

笠原郷は、後の騎西町・菖蒲町を中心とし、小林村・栢間町・笠原村等に亘れる地方ならん。

道智兵衛尉直基・道後小二郎助基・多賀谷二郎光基の四人目の弟に四郎季頼が北埼玉郡笠原村に居住して笠原四郎と称す。

笠原四郎季頼は、此の豊饒なる土地を根拠として勢力を振ひ、一族大いに滋繁せり。

その子、笠原平五太郎頼直は、始め平氏に従ひ、木曾義仲を攻めしが、後頼朝に従て忠勤を抽す。

その子、泰直、笠原高六太郎と云ひ、頼朝上洛の刻、随兵となる。

その子、泰光、笠原小六郎と称す。

正応五年六月、長崎左衛門尉頼綱の謀反の刻、討手に与して、経師谷に戦死す。

頼直の弟親景は、笠原十郎左衛門尉と云う。

頼直の弟親景は、笠原十郎左衛門尉と云い、頼朝・頼家二代に仕え、最も弓馬の術に通達す。

建久二年九月二十一日の小笠懸に、特に召されて、射手となり、又、頼家が伊豆に狩りせし刻、射人十人の内選ばれ面目を施したりき。

その妻は、比企能員の女なりしかば、能員の乱に与して北条氏に殺される。

笠原氏の活躍 吾妻鑑

◎ 建久元年（一一九〇）十一月七日丁巳、二品御入洛、行列先陣の随兵、二十四番 笠原高六（泰直）

◎ 稲村崎の小笠懸、建久二年（一一九二）九月廿一日丁卯、勝負 射手 笠原十郎（親景）

◎ 頼朝南都東南院著御。建久六年（一一九五）三月十日、下向御随兵笠原六郎・笠原十郎（親景）

◎ 頼家鶴岡社参、正治二年（一一二〇）二月二十六日壬午、御後衆 廿人 笠原十郎左衛門尉親景

◎ 頼家伊豆・駿河に狩す。建仁二年（一一二二）九月廿一日壬戌、射三十人の内 笠原十郎親景

◎ 比企能員の一族、館に拠し謀反、全員敗死しす。建仁三年（一一二三）九月二日丁卯、親景等彼の武威に敵せず。火を館に放ちて、各々若君の御前に於て自殺す。笠原十郎左衛門尉親景

多名氏・△立氏

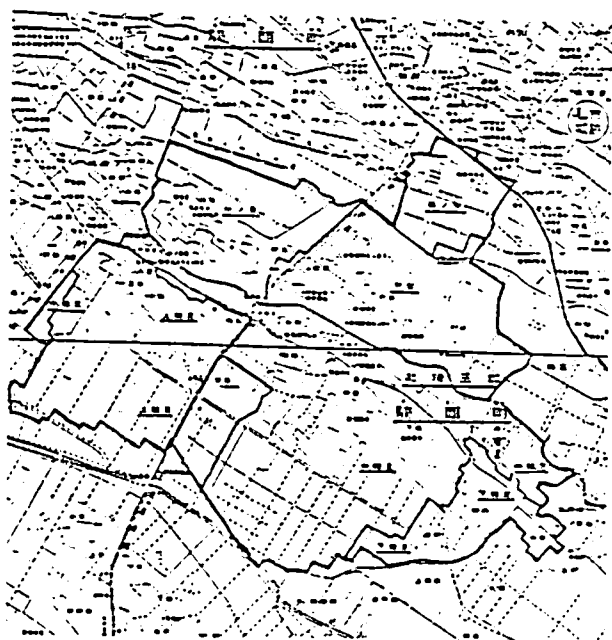
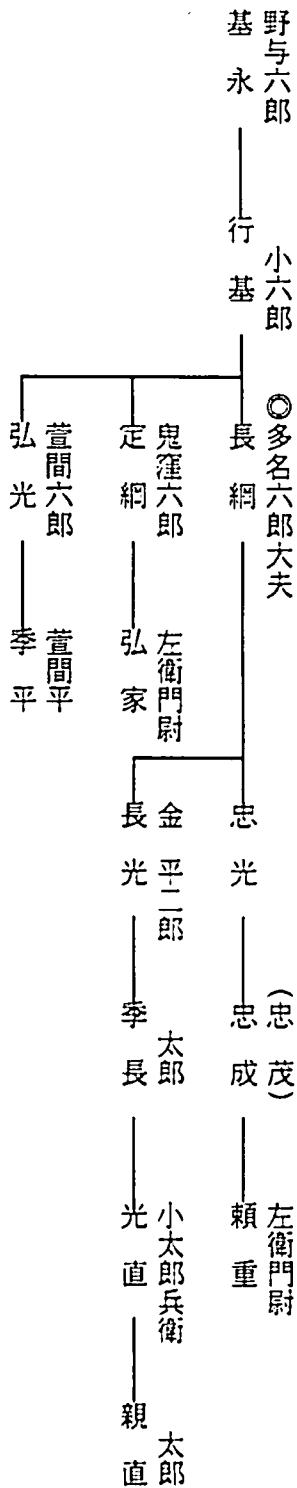
駿西町の内、種足地区中種足・中ノ目は・戸室等が、多名氏の本拠地と云える。

「野与党系図」には、野与六郎基永の子小太郎行基、その子に多名六郎大夫長綱・鬼窪六郎定綱・萱間六郎弘光の三子が見える。

「姓氏家系大辞典」に、多名氏、桓武平氏は野与党、武蔵の豪族にして、七党系図に「野与六郎基永一行基（小六）―長綱（多名六郎）大夫―忠光―忠成―頼重（左衛門）」と見ゆ。

「武蔵武士」には、野与六郎行基、の長子長綱は多名六郎大夫を称す、多名・金、両氏の祖なり、長綱の三子長光、金平次郎を称し、一季長―光直―親直と続く。

野与党系図



種足地区多名氏の拠点の区域図

種足地区の板碑

地藏堂

西ノ宮

下欠

阿弥陀

金蔵院 真言宗智山派

戸室

元応
康永
貞和

破片
破片
五?

一三一九〇二一
一三四二〇四五
一三四九 四月

日

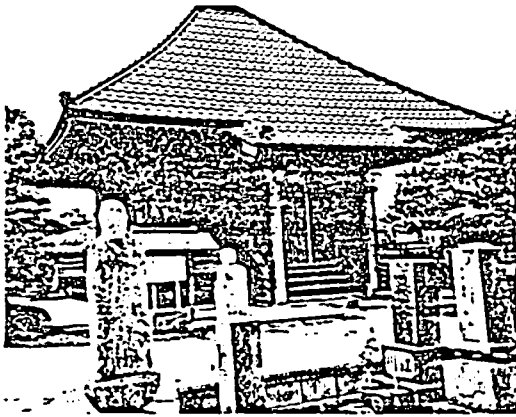
金剛胎蔵大日
花瓶
上下欠
阿弥陀

下欠
上欠

月

日

上欠



戸室・金蔵院

地藏堂

戸室

文保?上欠 一三二七〇一九
改造 完台上

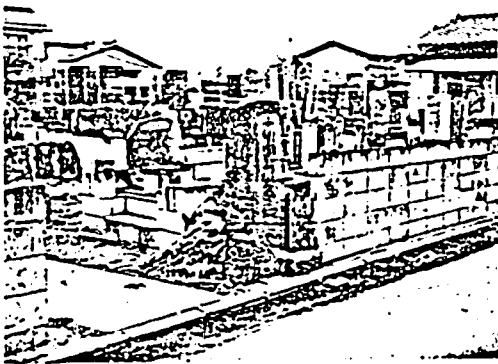
光明台石莊蔵
光明主尊积迦

大塚蔵氏宅

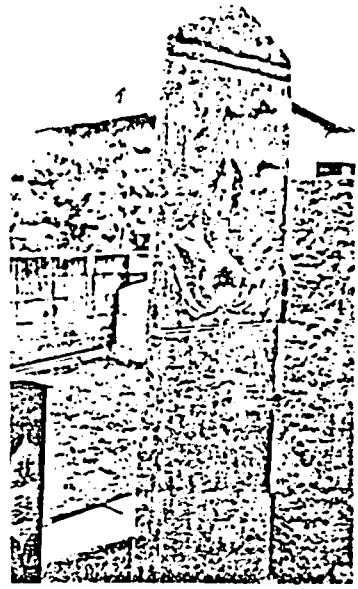
戸室一〇六七

下右欠

丸阿弥陀天蓋



戸室・地藏堂



戸室・地蔵堂文保板碑

天正寺入口路上

中ノ目

改造上欠

若宮八幡宮と改刻

観音堂

中ノ目

文明十八年 一四八六 十九名の交名 三尊三具足

川島新太郎氏墓地

上種足

弘口摩滅 一二七八〜八六

三尊造立趣旨摩滅



観音堂文明十八年交名板碑



中ノ目・観音堂

竜昌寺 曹洞宗 中種足

徳治三年 一三〇八? 六月 大日 地上完

小川賢一氏墓地 中種足

弘安 摩滅 一二七八、八八
 正中 三年 一三二六 二月 阿弥陀 上下欠
 貞和 一三四五、五〇九月十九日 光明阿弥陀上欠
 摩滅 光明 上下欠

谷部房次氏宅

文安八年 一二七一 八月 十二日 阿弥陀蓮台線刻
 弘安五年 一二八三 秋旬 完 阿弥陀天蓋高炉
 元亨元年 一三二一 八月 廿二日 観音・勢至
 元亨二年 一三二二 光明主尊莊嚴弥陀
 元徳元年 一三二九 十二月 二日 阿弥陀 完
 正慶三年 一三三三 二月 廿九日 光明莊嚴阿弥陀
 暦応四年 一三四一 三月 三十日 光明阿弥陀
 康永三年 一三四四 十一月 廿五日 光明大日
 延文三年 一三五八 十一月 大日 真言中央
 永和二年 一三七六 六月 廿五日 大日蓮台線刻道善
 永和二年 一三七六 八月 廿三日 大日道法真言中央
 康応二年 完 积迦 口法
 下欠 阿弥陀

泉蔵院 曹洞宗 中種足

元弘三年 一三三三 十月 日 阿弥陀 完
 建武元年 一三三四 十月十二日 阿弥陀 完



中種足・谷部房次氏宅板碑群

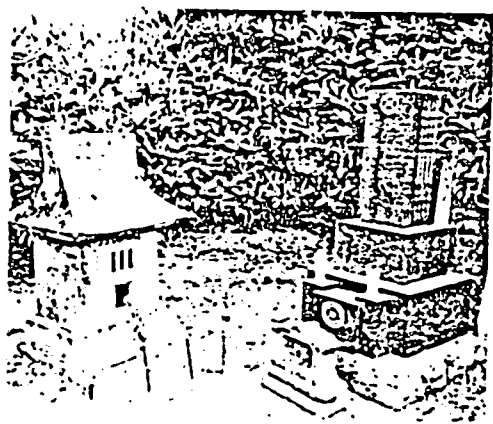


中種足・谷部氏宅前泉蔵院

石宮墓地(谷部家墓地)

中種足

文永	十年	一二七三	十二月	阿弥陀 下欠
文永	十一年	一二七三	七月	阿弥陀蓮台線刻
文永	二年	一二七七?	五月	上欠花瓶建治?
弘安	五年	一二八二	十月	阿弥陀蓮台線刻
弘安	十年	一二八七	三月	阿弥陀 完
正応	三年	一二九〇	九月	三尊 略完
永仁	五年	一二九七	五月	三尊 完
正安	二年?	一三〇〇?	八月	阿弥陀下欠
正安	三年?	一三〇一	三月	三尊 完
徳治	三年?	一三〇八?	四月	阿弥陀 完
延慶	二年?	一三〇九?	二月	阿弥陀人名摩滅
延慶	三年	一三一七	七月	大日 下欠
文保	元年	一三一七	五月	大日 略完
文保	元年	一三一七	七月	大日 完
文保	元年	一三一七	十一月	大日 完
文保	二年	一三一八	十二月	阿弥陀上下欠
元応	二年	一三二〇	十二月	大日 下欠
元応	二年		廿日	大日 上下欠
元亨	元年	一三三一	六月	大日 完
元亨	元年	一三三一	十月	大日 完
元亨	元年	一三三一	十二月	阿弥陀光明
嘉暦	二年	一三二七	十二月	阿弥陀上下欠
元徳	三年	一三三一	九月	上下欠
暦応	四年	一三四一	正	阿弥陀光明下欠
暦応	四年	一三四一	廿日	阿弥陀光明下欠
暦応	四年	一三四一	〇〇	光明釈迦 最小
康永	二年	一三四三	〇	阿弥陀光明下欠
康永	三年	一三四四	二月	阿弥陀光明完
康永	三年	一三四四	五月	阿弥陀光明完
貞和	五年	一三四九	十二月	阿弥陀光明完
			時正	弥陀光明逆修完



中種足・石宮墓地

貞和	五年	一三四九	四月	阿弥陀 下欠
貞和	五年	一三四九	十一月	欠 光明上下欠
観応?	三年	一三五二?	十一月	阿弥陀光明 完
文和	三年	一三五四	四月	阿弥陀光明 完
延文	三年	一三五八	十一月	釈迦 完
応安?	三年	一三七〇?		阿弥陀 下欠
応安	六年	一三七六	八月	阿弥陀偈3完
永和	三年	一三七七	十月	釈迦大日真言
至徳	三年	一三八六	七月	光明大日 完
応永	五年	一三九八	七月	阿弥陀光明 完
弘治?	三年	一五五七?	十一月	阿弥陀上欠最新
摩滅			日	金剛界大日完
摩滅			六日	釈迦 完
摩滅				阿弥陀岳〇〇〇完
欠				弥陀蓮無天蓋

破損片多数有るも以下省略

鴻 茎 地 区

野与党系図の内、この地域に拠点を持つ者の氏名は、判然としないが、私市城址が在り、騎西町最大の板碑が金剛院に有り、付近の寺院や、民家等にも多数の板碑が見られるので、有力な同族の居住を認める事が出来る。

根 古 屋

新編武蔵風土記稿

根古屋村は、江戸より行程十二里、庄名・及檢地の年代・領主の遷替え等総て騎西町場と同じ、此地昔は、騎西郷の内なり、別れて二村とせし年代は知らざれど、正保の図には已に二村とす。

当時私市城の根古屋の地なれば、村名にも呼ぶと云、其の城は、太田道灌の造管なり、詳なる事は、城跡の条に出せり、民戸三十四、東は牛重(うしかさね)村、西は外川村、南は騎西町場・鴻茎の二村北は日出安村なり、東西へ五町、南北六町余、用水は新川を引用ゆ。

小名 足軽町、昔城主有し頃足軽等住せし地なるべしと云、

城耕地、古城跡の廻りを云、

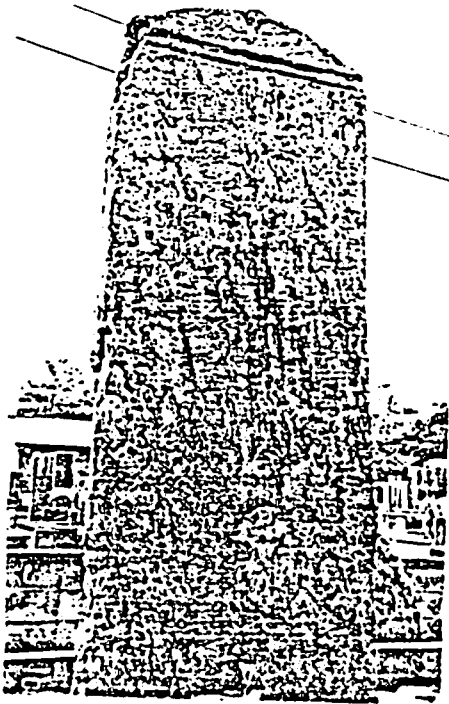
石阿弥陀耕地、高さ一文余、幅四尺余の板碑在り、三尊の弥陀を彫れり、弘法大師爪を以て彫刻有りしとて、爪の弥陀と云、この碑有るを以て起りし名なるべし、

沼 田、古城有し頃の、構の沼の跡と云、

代官町、中宿・樹木畑・方原・つき道・新田等の小名有り。

金 剛 院 新義真言宗 号神光山大日寺
当寺は、山城国醍醐報恩寺の末山なり、慶安年中寺領二十五石の御朱印を賜はれり、

当寺は、私市城築當の頃、日出安村より引移りと、されど当寺に所蔵せる古器蓋の裏に、文禄五年住僧私源の時引移せしと有るは、城築當の後の事ならん、私源は、騎西町場実乘院の開山にして、慶長年中寂せり。



根小屋・金剛院全景

廃せし年代詳ならず、されど騎西町場村民所蔵せし城壁の図有り、之寛永年中松平伊豆守領せし時のものなるよし、其の家人の姓名等を記したれば、この頃迄も城壁の存せし事知らる、

古くは、騎西山の根城共、土人又根古屋城共云、私市と云う事は騎西町場に弁せり。

本丸・二ノ丸・三ノ丸・厩及鉄炮場等、今は竹林及雑木生茂れる地となれり、本丸は廻り九十間余、本丸・二ノ丸其の外の所々巡りに土手の蹟残り、大手口ありし所は、東に向へる様にして、之の外城の廻り沼なりし所、今は大略水田と成れり。

土人所蔵せる旧記に、山根城は、太田道灌築き、城主本間弥九郎・夫より小田大炊助・小田助三郎居城たりしと、

又「甲陽軍鑑」に云、永祿五年三月上杉輝虎、成田長康が次男小田助三郎頼興が籠りし私市城へ押寄せ、一日一夜攻戦ふ、城中僅か五十騎ばかり、終に打負て助三郎自害し、則城をも焼払と云々、

初輝虎城外を巡見し、廊下橋の間より婦人の影の移るを見て、人質曲輪なる事を知り、沼を埋め無体に攻破りしと云、



私市城物見台跡



私市城復元した天主閣

「小田原北条記」に載する処は、小田・降を請とあり、何れが正しきを得たりしや知不、

且つ助三郎を「廃城考」に伊賀守と記す、助三郎の初の名なるべし、

御入国の初松平周防守康重、武州騎西に於て二万石を賜ふと、其の家の譜に見えたるは此処の事也、之の後領主の遷替は騎西町場の条に弁せり。

註、「甲陽軍鑑」は、「上杉輝虎強攻めで落城、城主小田助三郎城を焼払い自害す」、「小田原北条記」には、「城主小田助三郎、降るを請う」とあり、落城に関する記述の違いを記したものである。

芋 荃 村 新編武蔵風土記稿

山根庄海上郷と称す。昔は芋ヶ荃と唱えし由。

小名 本村 戸塚 白山 東山 北谷

牛 重 村 新編武蔵風土記稿

牛重村は、山根庄海上郷と称す。

小名 小屋敷 大坊 広島 下新田 横新田

天神社 第六天社 浅間社 三社共万福寺持

妙光寺 日蓮宗中山法華寺末種垂山と号す。

万福寺 真言宗正能村龍花院末浅間山と号す。

他に 十王堂 有り。

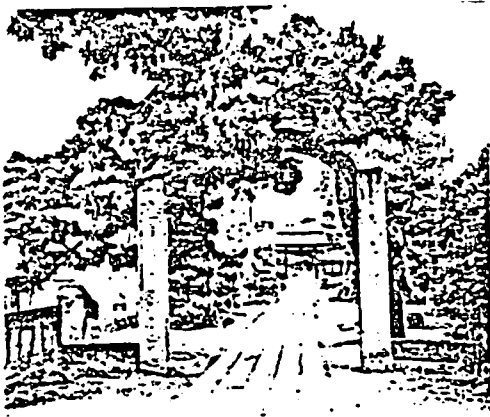
鴻 荃 村 新編武蔵風土記稿

鴻荃村は、山根庄海上郷と称す、古へ鴻ノ荃と唱へしが今は「ノ」の字を省きて用ひず。

小名 大北 中在 別府 白山 七軒

寿昌寺 禅宗曹洞派成田龍淵寺末万亀山と号す。

開山明庵祖果、天正八年十月八日示寂す。寺伝に、当寺は相州鎌倉長勝寺仏燈禪師の開闢にして寺領も七百石有しが、永祿元年新堀村に住せし佐々木某、当寺に狼藉をなし住僧を殺害して寺領をも奪取す、其後忍の城主成田下総守の命により、当寺を開山す、僧明庵は成田家の族類にて落髮し僧と成りしと云う。



鴻荃・寿昌寺全景

鴻基地区の板碑

柿沼政義 氏宅 根小屋

観音寺 曹洞宗 根小屋

至徳元年 一三八四 八月廿八日 大日 〇弥陀

摩滅 上下欠 阿弥陀 右欠 上欠二尊

嘉元二年 一三〇四 二月 光明上下欠

欠 三尊 下欠

欠欠 大日 弥陀心呪

関口清次郎 氏宅 牛重

金剛院 真言宗智山派 根小屋

正和四年 一三一五 四月廿八日 契昌尼命日也

摩滅 元年 一三一 二月 日 三尊来迫凶最大

応長 元年 一三一 二月 日 弥陀南無阿弥陀

摩滅 地上完 丸に大日

欠 下欠 三尊莊嚴体

摩滅 上欠 弥陀十仏各蓮台

剥離 上欠 阿弥陀

摩滅 上下欠 弥陀偈文最終例

応永三十二年 一四二五

文永六年 一二六九 七月廿八日 偈6主不動明王

坂庭末吉 氏宅 根小屋

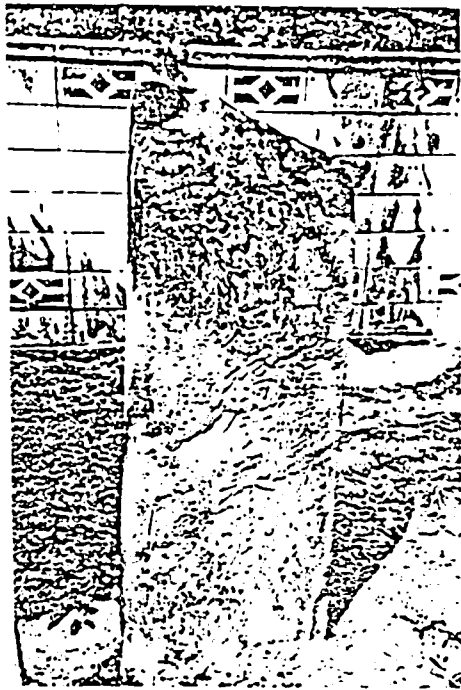
万福寺 真言宗智山派 牛重

元応元年 一三一九 十月七日 光明上欠

改造 完 墓石に改造

篠塚豊蔵 氏宅 根小屋

文亀三年 一五〇三 十一月廿九日 南無妙法蓮華經

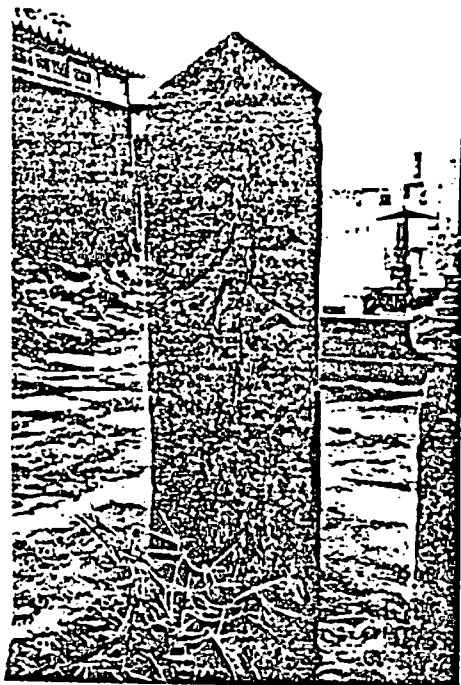


鴻莖・寿昌寺応永廿九年板碑

寿昌寺 曹洞宗

鴻莖

弘長 四年	一 二六四	三月 日	阿弥陀 摩滅
正応 三年	一 二九〇	卯月	偈10
文保 二年	一 三二八	三月十九日	光明 上欠
観応 三年		二月廿七日	大日 略完
延文 四年	一 三五九	十一月廿四日	光明 上欠
永和 四年	一 三七八	十月廿二日	阿弥陀 花瓶
応永十四年	一 四〇七	十二月 五日	阿弥陀 略完
応永十五年	一 四〇八		弥陀 道口禪門
応永廿六年	一 四一九	十月 日	弥陀 道永
応永廿九年	一 四二二	十二月 五日	弥陀 了覚禪門
下欠			弥陀 光明
下欠			阿弥陀 下欠



医王寺・板碑

医王寺 曹洞宗

芋莖

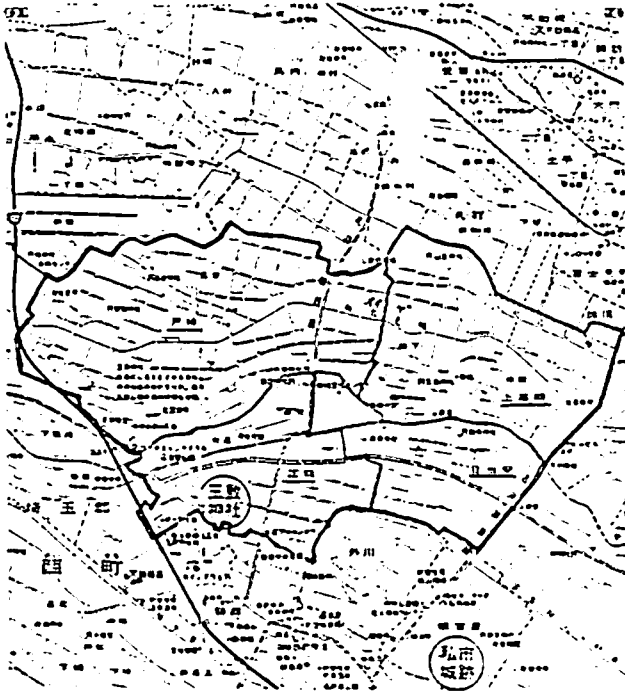
摩滅	上下欠	塔四方仏多聞天
安元 二年	上下欠	阿弥陀
延久 二年	一三〇三?	偈10 乾元二?
上下欠	卯?	弥陀延慶四年?
摩滅	上下欠	大日二尊欠
		大日 上欠
下戸塚路上		
摩滅		
永享十二年	一四四〇	十二月 三日
		大日 下欠
		弥陀道德禪門

高柳地区

高柳地区は、北は旧利根川河道（現況は水田地帯）を境として加須市と接し、東は、行政区割を以て同じく加須市に接し、北より戸崎・正能・上高柳・日出安の各村が含まれる。

野与党一族の内、吾妻鑑や野与党系図・武蔵武士等に出て来る、此の区域の地名を苗字に冠した人々の名前としては、高柳氏・戸崎氏がある。

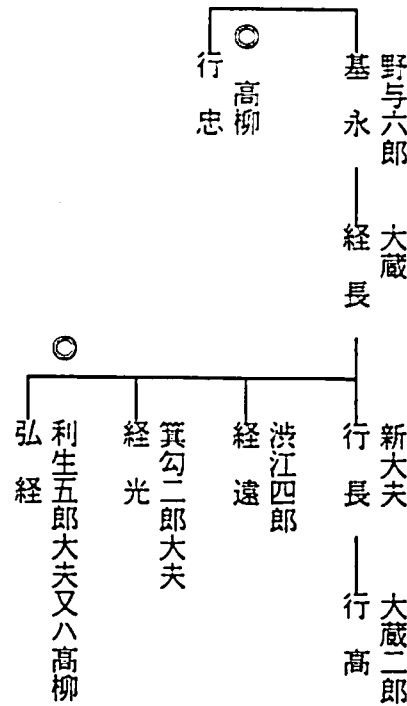
当時其等の人々が、生活して居た拠点の痕跡は、各地に残されている、其の時代年記銘の板碑を見る事で、其れ等を察知する事が出来る。



高柳地区の区域地図

高柳氏

野与党系図中、初期野与党系の高柳氏に付いては、吾妻鑑に高柳四郎三郎行忠と、又建長三年正月將軍行列隨兵中に高柳四郎三郎行忠の名見ゆ。（初期野与党）



野与党系図中、後期野与党に、経長の子十郎行長と同列に箕勾二郎太郎経光、洪江四郎経遠、利生五郎大夫又高柳弘経の名が出ています。

この高柳氏の拠点は、騎西町上高柳付近に拠したものと思われる。初期野与党系高柳氏も、同地では無いかと思われ。

千葉大系図との比較は、十郎行長の項が、多少食違ひが見えるが、党主の立場の移譲に、何等かの関係が有ったのでは無いかと思われる。因に、行長の号に「大蔵大夫」「龍大夫」「利生大夫」「新大夫」等と種々あるは、その立場の推移が窺えるものである。

高柳氏の事跡 吾妻鑑

◎ 文永二年(一二六五)五月、高柳幹盛が、所領に付いて争論に及ぶ、廿三日庚申、高柳弥次郎幹盛と縫殿頭文元と、所領に就き争論の事あり、幹盛確執の余りに訴へ申して曰く、云々、仍て今日評議有。

高柳幹盛本貫の地は、当町の上高柳付近と云われている。野与党に属した一族の高柳氏と思われる。

註、大河戸氏出身の高柳氏の本拠地は、栗橋町高柳であり、大河戸氏は其の姓藤原氏である。

野与党一族は、其の姓平氏であり、自ずと其の出自を異にする。

戸崎氏

戸崎氏の記述は、野与党系図には見当らない。吾妻鑑には、戸崎右馬允国延の活躍が見える。

註、戸崎氏の拠点は、騎西町史には、『新編武蔵風土記稿』によれば、当町戸崎村の項に「城跡の形あり、廻りに土手と覚しき跡見ゆ、戸崎右馬允と云う者の居城なりと云う」。

『吾妻鑑』に見える戸崎氏は、当地に居住した氏族と考えられる。

又、同所には元屋敷・城附・城下等の呼称があり「戸崎城」跡の伝承も残されている。

埼玉郡之十六 羽生領、新編武蔵風土記稿

戸崎村は、埼玉郡羽生領、古くは太田庄に属す。

小名 城下ニ城跡ノ形アリ土手覚シキ跡見ユ、戸崎

右馬允ト云フ者ノ居住也ト云。・名倉・広島諏訪社・牛頭天王・龍宝寺ニ禅宗臨濟派金桂山ト号宝光寺ニ新義真言宗諏訪山瑠璃院ト号本尊不動安。

註、戸崎氏ニ戸崎村は、嘗ては、旧利根川の対岸太田庄で、近くに久下氏・鎌田氏・真板氏等皆私市党の出自を持つ氏族が居住して居るので、之等と同族では無いかと思われる。

上高柳村 新編武蔵風土記稿

上高柳村は、江戸より十四里山根庄に属す、文永の頃高柳弥五郎 幹盛と云う者住せし故、此の唱ありなど物に見ゆれと土人は伝へず。

元は下高柳村と一村なりと云へと正保の改に上下二村と分村せしも古き事知るべし。

小名 西裏 柳ノ下 花ノ木 新田

下高柳村 新編武蔵風土記稿

江戸よりの行程検地等前村と同、太田庄に属す。

小名 寄井 上小宮 下小宮 沼頭 千原 吉丁目

正能村 新編武蔵風土記稿

江戸よりの行程検地等上高柳村と同じ。

小名 大公方耕地 東照宮御遊覧の刻当所に御床几

居せし所故唱ふと伝。

宮内 騎西町場の久伊豆神社(玉敷神社)

元宮有し地(前玉神社)故唱ふ。

一夜塚 永禄五年上杉謙信騎西城攻略せし時

一夜に築て士卒を屯せし地故唱ふ。

又、戦死の屍を埋めし塚とも云う。

雷電塚 新田耕地

日出安村 新編武蔵風土記稿

日出安村は、山根庄海上郷と唱。騎西町場に同。

小名 西裏 新田 三宮寺 内柵 外柵(シガラ

ミ)

駒形権現社 村の鎮守、根小屋村金剛院は当社の傍

に有りしが文禄の頃根小屋村へ移せりと云。

御神体は古き木塊の如くにして詳に述べ難し。

保寧寺 禅宗臨濟派山城国妙心寺末在安山と号す。

元は、鎌倉建長寺の末也とぞ。

開山仏覚禪師は建武元年十月十一日寂せり。

此の僧は鎌倉建長寺中回春庵を開きし人にて、是

を請待して開山と云。

本尊弥陀を安ず。

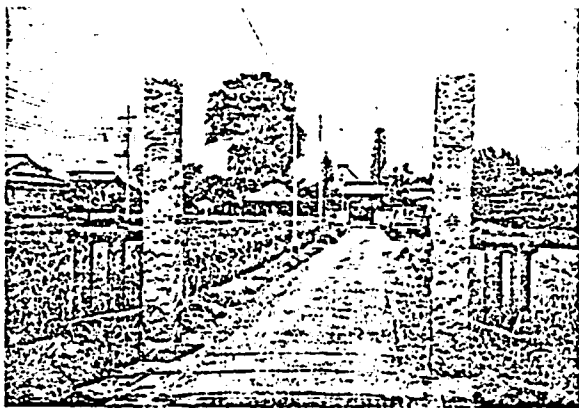
保寧寺観音堂 保寧寺持ち、大慶禅庵と云う、嘗て

は鎌倉街道筋に当たり、又、新西国第十五番札所

記載の碑等あり、嘗ての隆盛を忍ばせる。

本尊の三尊は、県重要文化財にして、保寧寺の宝

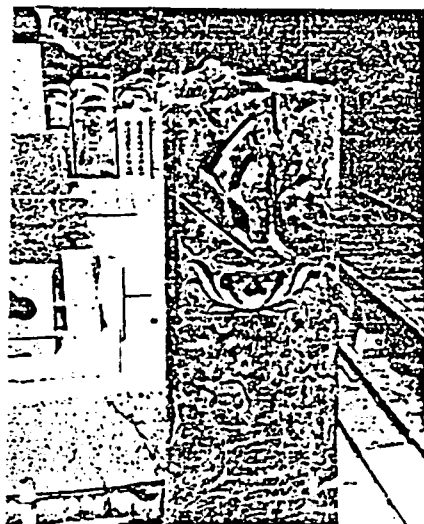
物堂に保存されている。



正能・宝光寺全景

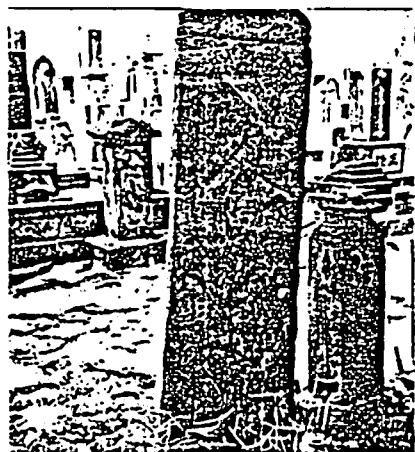
高柳地区の板碑

宝光寺 真言宗智山派 正能
 元応元年 一三一九 孟夏 日 阿弥陀偈3
 永享十年 一四三六 二月廿二日 逆修道祐禅門

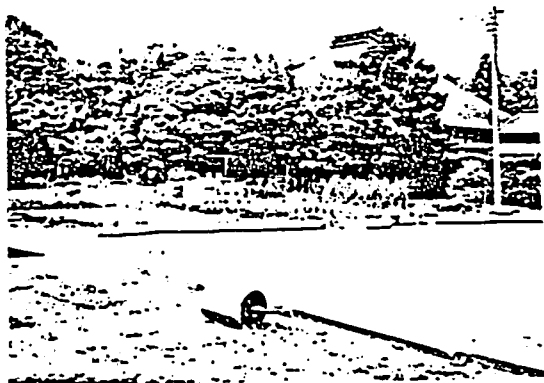


宝光寺・永享十年逆修板碑

竜花院 正能
 摩滅 弥陀偈3 完
 応安四年 一三七二 欠
 永享十二年 一四四〇 妙口騎西最小完
 嘉吉三年 一四四三 弥陀妙心禅尼
 下欠 阿弥陀
 下欠 阿弥陀
 六月 一日



竜花院・永享十二年板碑



正能・竜花院全景

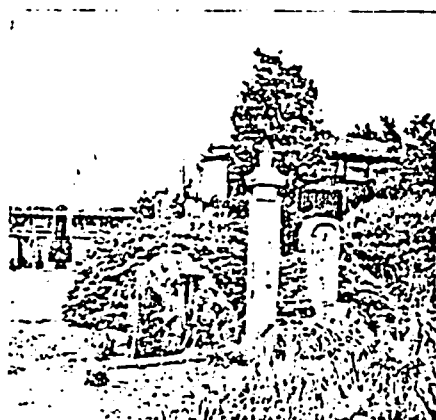
保寧寺觀音堂

日出安

弘安 七年 一二八四

下欠

三尊大隨求小呪
南無阿彌陀仏



保寧寺觀音堂全景

保寧寺 臨濟宗妙心寺派

日出安

(無し)

正中 三年 一三二六 三月 二日

欠三年甲戌 一三三四? 破片 光明 上下欠 光明正慶三年?

応安 下欠 弥陀花瓶一对

応永 三年 一三九六 十月 十日 弥陀偈3口仙

応永廿二年 一四一五 弥陀光明下欠

亨徳 二年 一四五三 七月十八日 三尊妙尼禅尼完

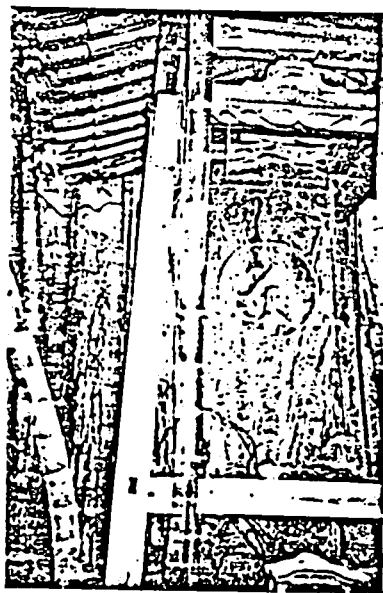
文明 七年? 一四七五? 三月 廿日 弥陀道西禅門

剥離 上欠 偈か願文摩滅

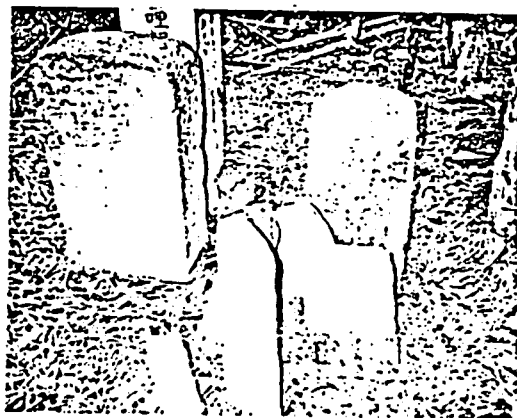
下右欠

大形板碑の破片

以下10個破片欠蔵するも省略す。



保寧寺・応永三年板碑



保寧寺・亨徳三年板碑

次回は、野与党シリーズ 2、白岡編 以上

野与党系图

(抄) (群書類従)

桓武天皇 — 葛原親王 — 高見王 — 高望王

村岡五郎大夫
從五位下
良文
坂東諸平氏祖
村岡次郎
忠頼

千葉 恒 恒 将 常 永 元 宋 近 永
野与党祖
胤宗
野与六郎
野与庄司
奥州之役戰死

千葉小太郎 周防八郎 野与六郎 野与六郎 小太郎
基永 行基

村山貫主 村山党祖 頼任

多名六郎大夫 長綱 金平二郎 長光 太郎 長光 小太郎兵衛尉 太郎
親直

季 光 茂 某 光 四郎 親直

忠光 威イ 忠茂 左衛門尉 頼重 忠光 三郎太郎

参 考 資 料

吾妻鑑
新編武蔵風土記稿
群書類縦
埼玉県史
騎西町史
騎西町の板碑
武蔵武士
武蔵七党系図

第百二回研究発表 越谷市郷土研究会

野与党シリーズ 1

野与党諸氏拠点の考察 騎西編

発刊日 平成三年八月三十日

著者 山崎善司

発行者 越谷市弥生町 一の九

山崎善司

発行所 越谷市弥生町 一の九

山崎企画工房

TEL 6213733

会 員 募 集

越谷市郷土研究会
△会長 小島 誠

越谷市郷土研究会では、只今、会の充実を計る為、会員を募集して居ります。
是非、此の機会に御入会をお奨め致します。

越谷市郷土研究会は、会員の皆様の努力により、長く続けている事では、埼玉県内随一です、研究発表は、100回記念を、又、史跡巡りは180回を越しました、会員の何方でも研究発表の機会が与えられますし、意欲の有る方でしたら、会員の何方にでも史跡巡りの案内をお願いして居ります。
和やかな会です、特に越谷市の歴史研究に意欲の有る方の、御入会をお待ち致して居ります。

訂記

1、所属 越谷市文化連盟

2、資格 越谷市の歴史を研究したい方、知りたい方なら何方でも結構です。

3、行事 史跡巡り・研究発表・講演会・会報の発行・講師派遣・越谷市文化祭・市民祭参加等。

4、会費 年会費 2000円也、 会報・諸案内状・諸会議費等。
史跡巡り 都度の会費 新忘年会 都度の会費

5、申込み 当会所定の申込書に、住所・氏名・電話番号・年令記入の上、左記に申込み下さい。

6、申込先 越谷市宮本町 3-117-18

谷岡隆夫方 越谷市郷土研究会
TEL 62-17527